

『ねずみ』

小さなねずみがひよっこり現れた。少年は一瞬驚いたが、たちまち嬉しくなった。少年は普通のねずみは何度か見たことがあるが、こんな小さなねずみを見るのは初めてだった。

大人の親指ほどしかない。とにかくかわいい。薄暗い灯りの下で、つやつやした玉のように輝いて見えた。少年はねずみを脅かさないように、頭のとっぺんから足先まで全てを硬直させ、息もできるだけ抑えて、子ねずみを見守った。ねずみは用心深く辺りをきよろきよろ見回し、おぼつかない足取りでうろろし始めた。鼻をびくびくさせ、そのせいで銀色のヒゲが小刻みに震えている。

そして、少年が息苦しくなって息を少し吐き出すと、ねずみは思ってもみなかった素早い身のこなしで、薪の隙間に姿を消した。少年はやつとの思いで、一つ大きく深呼吸をした。懐中電灯でも持ってきて、床に這いつくばり、薪の隙間を覗いてみたい衝動にかられたが、じっと我慢することにした。

少年は釜に火を付け、ねずみが姿を消した隙間をちらちら見やりながら、いつも通り十分間ほど薪を勢い良く燃やした。そして風呂場へ戻り、湯船の蓋で湯をかき混ぜて温度を確認すると、台所の母親の許へ走った。

「おかあさん、物置にねずみがいたよ。子どものねずみだ。小さくてとてもかわいかったよ」

少年は、母親も「そうかい」とニコニコするものと思っていた。ところが母親は、
「やだねえ、大きくなったら大変だ。あっちこっち喰い荒されてしまうよ。お父さんに頼んで何とかしてもらわなくちゃ」

と言った。少年は、慌てて、
「ああ、いいよ。ぼくが何とかするよ。ねずみ捕りでも
仕掛けてさ」

と言いつ返した。すると母親は、少年を疑う目で真面目
な口調で言った。

「かわいがったりしたらだめだからね、いい？ねずみは
大変なんだからね」

少年は、全く予想もしなかった母親の態度や言い方に、
言いようもなくがっかりした。そして、どうしたものか
考えた。『あの子ねずみを手なずけて、悪さをしないねず
みにしよう。それなら、お母さんやお父さんも文句を言
わないはずだ』

少年は次の日、その日は風呂を沸かす日ではないけれ
ど、昨日ねずみを見かけた時間に物置へ行った。ポケッ
トには母親に内緒でくすねた食パンを一枚忍ばせていた。
少年はパンをひとかけら、昨日子ねずみが姿を消した
辺りの薪から十センチほど離れたところに置き、残りの
パンをかじりながら待ち構えた。しばらくすると、隙間
からひくひく小刻みに動くねずみの鼻先が見えた。少年
は小躍りしたい気持ちでぐっと抑え、手も口も動きを止
めて見守った。ねずみは周りをキョロキョロ見回しなが
ら、恐る恐るパンに近づくと、ひよいとパンを両手で掴
んで立ち上がり、口に咥えて、昨日と同じ素早さで帰っ
ていった。一連のそうした動きが、昨日以上にかわいか
った。少年は、口に出さないように『やったー』と心で
叫び、音に出さないように手をたく振りをした。しかし、
て、また同じ場所にパンをひとかけら置いた。しかし、
その後はしばらく待ったがねずみは姿を見せなかった。
少年は長居して母親に疑われないように、残念な気持ち
を抑えて物置を出た。ポケットには子ねずみの三日分ほ

どの食料を残しておいた。

そして次の日、この日も風呂を沸かす日ではないけれど、少年は母親に、ねずみ捕りを仕掛けるからと言って人参のひとかけらをもらい、物置へ行った。予想通り、昨日置いたままにしたパンは消えていた。少年は『しめしめ』とほくそえんだ。そして人参を歯でさらに小さく食いちぎって、パンの上におかずのように添えて、同じ場所に置いた。昨日と同じくらいの待ち時間で、子ねずみが姿を見せた。ねずみはまず小さな人参のかけらを、放り込むように口に入れ、さらに昨日と同じようにパンを口に咥えて戻っていった。少年の目には、子ねずみの慌て方が、一昨日より昨日のほうが、昨日より今日のほうが少なくなつたと見てとれた。

その翌日、この日は風呂を沸かす日で、少年は安心して物置でゆっくりすることができた。少年はパンのひとつ、かけらをさらに三つにちぎって、いつもの場所に一個、そこから十センチ離れたところとさらにもう十センチ離れたところに一個ずつ置いた。しばらくすると、ねずみが待っていたかのように――少年にはそう感じられた――姿を見せ、最初の一個をいつものように咥えた。そして、少年が予期していたように、二個目を見つけそこへ行つたかと思うと、咥えていたかけらを口の中に押し込み、二個目を咥えた。あまりにも考えていた通りにことが展開するので、少年は嬉しくてしかたなかった。ねずみは三個目もそのようにして口に咥え、もう無いことを見てとると、薪の隙間へ帰っていった。

少年は薪をくべながら考えた。最近少年の家で、ねずみがかさごそ音を立てることはない。ということはこの子ねずみはどこか別の場所で生まれて、ここへ迷い込んだに違いない。この先もつと成長したら、えさは毎日

らえたとしても、ここにじっとしてないであっちこっち動き回るだろう。そうしたら親たちにも感付かれ、ねずみ捕りで捕まえられてしまう。そしてあのねずみのように・・・。

少年は、ねずみが動き回らないように、何かに入れようと考えた。そうだ、ねずみ小屋で飼えばいい。そう思いつくと、少年はすぐにもねずみを捕まえないではいられなくなつた。ねずみ小屋をどうやって作るか、毎日のえさをどうするかは頭になかつた。

少年は脇の棚の、父親の大工道具やペンキの缶や角材が置かれた奥のほうからねずみ捕りを探し出した。バネ仕掛けの口をこじ開けて、留め金を慎重に引っ掛ける。細かい薪を隙間から差し込んで釣り針状のフックを軽く突つつくと、驚くほど大きな音をたてて蓋は勢いよく閉まつた。少年はもう一度セツトしてからフックにパンのひとかけらを引っ掛け、子ねずみの出入り口のすぐ前に置いた。

少年はその晩寢床で、昼間は考えないようにして済ましたのに、いやなことを思い出してしまった。まだ小学生になるまえの五歳のときのことだった。あるとき、ねずみ捕りに黒くて大きくてグロテスクな――母がそういう言い方をした――ねずみが掛かつた。悪さをされていまいましく思っていたのだろう、父はニヤニヤしながら、水をいっぱい張ったバケツにねずみが入つたねずみ捕りを沈めた。ねずみはしばらくの間、上に下に右に左に水中を駆けずり回り、針金の間から鼻の先を必死で突き出した。いくらもがいても鼻先は水面には届かず、小さな泡をぷつぷつ出すと、やがて腹を上にして目をむいたまま天井に張り付いて、動かなくなつた。少年はその先、なんでこんなものを五歳の自分に見せたと、父親を恨ん

だ。元気に動き回っていたねずみが空気を吸えなくて死んだ。どんなに苦しい思いをしたかは、自分で息を止めてみれば分かる。あのねずみは自分を見ていたかも知れない。そう思うと言いたいようもなく怖い。

結局少年は、小屋のことやえさのことを考えることなく眠ってしまった。

あくる日少年は、学校から帰るとすぐに物置へ行った。ねずみ捕りの中に子ねずみがあった。少年はついに子ねずみが自分のものになったと思った。もうどこへも行く心配はない、親たちに狙われる心配もない。少年は学校にいた間に小屋のことと、えさのことを考えていた。小屋は、とりあえずは物置のみかん箱を使う。大工道具やガラクタが入った箱をいくつか整理すれば一個ぐらい空くはずだ。問題は上に張る金網だが、その代わりに板や角材を少しずつつ隙間を空けて並べて、上から何かのせる。ただ、こんな子ねずみでも既に板をかじる力があるか気にはなる。できるだけ早いうちになんとかしなければならぬ。えさは台所の生ごみや食パンだ。

少年は子ねずみが入ったねずみ捕りの取っ手を持って、顔の前に掲げた。子ねずみは少年の方を見るでもなしに、せわしくかごの中を走り回る。少年は空いたほうの手でポケットからパンのかけらを取り出し、親指と人差し指でつまんで、隙間から差し入れた。指の中には入れてないつもりだったが、子ねずみの鼻先は隙間から外に出た。あつと思つた瞬間、少年の人差し指の先にねずみの口が届いた。少年はかごを放り投げた。指先には五ミリほどの間隔で二つの赤い点々が出来ており、見る間に赤い玉となつて膨らんでいった。少年は指を思い切り振つて忌まわしい血を払い飛ばし、物置を飛び出ると、慌てて風呂場の木戸から家に入った。ねずみは怖い病気を持って

いるかもしれないと聞いたことがある。少年は救急箱からオキシフルを出して念入りに消毒しさらに赤チンを塗った。

少年は子ねずみに裏切られたと思った。こんな裏切られ方を経験するのは生まれて初めてだった。子ねずみが憎らしくなった。何かをこれほどまでに憎らしいと思うのも初めてだった。

次の日もその次の日も物置へ行くことはなかった。そしてその次の日、風呂を沸かすのに少年は物置へ行った。ねずみ捕りのかごが隅の暗がりの方に転がっている。次第に慣れてきた目で見ると、横になったかごの中に、小さな黒っぽい塊がある。少年はもうそれを相手にはせず、いつも通り釜に火をつけた。そうして火が勢いよくなり薪を何本かくべると、左足を伸ばしてかごを引き寄せた。少年は、かごの口をこじ開けて親指と人差し指で中のものを慎重につまみ出すと、その凍りついたぼろきれのような塊を振り子のように振って、燃え盛る火の中に放り込んだ。